

小学生との交流会を通じた大学生の学び： 日本語教育課程における試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大河内, 瞳 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4877

小学生との交流会を通じた大学生の学び —日本語教育課程における試み—

学芸学部 国際英語学科 大河内 瞳

要旨：本稿は、日本語教育課程の必修科目の1つである日本語教育学概論で行った小学生との交流会についての実践報告である。日本語教育課程を履修する大学生の中には、同世代で似たような背景を持つ人とは交流した経験があっても、世代や背景が異なる人と交流した経験がない大学生が少なくない。そこで、2021年度、東大阪市教育委員会の協力を得て、東大阪市にある小学校2校の5年生160名と、日本語教育学概論を履修する大学生39名がオンラインで交流を行った。

交流会では、一学期間の大学の授業で学んだことを踏まえて、大学生が日本語教育について発表をした後、小学生と大学生のディスカッションを行った。交流会後に提出してもらった大学生の振り返りレポートから、授業を行う大変さ、授業をする側の姿勢・態度の重要性、積極的に学ぶ姿勢・態度の重要性、日本語教育についての理解という4つの気づきを得ていることがわかった。これらの振り返りから、交流会の目的はおおむね達成することができたと言える。

キーワード：小学生との交流会、大学生の学び、日本語教育課程、異なる背景の人との関わり、相手に配慮して伝える能力の育成

1. はじめに

大阪樟蔭女子大学では日本語教育課程が開講されており、2021年度は80名程度の学生が日本語教師の資格取得を目指して学んでいる。日本語教育課程に登録しているとは言え、多くの学生は、自分とは異なる背景を持つ日本語学習者と交流したことがない。それ以前に、同世代で似たような背景を持つ人との交流経験はあっても、世代や背景が異なる人と関わった経験がない学生も少なくない。

そこで、学生たちが日本語学習者だけでなく、世代や背景の異なる人たちと交流する機会を多く持ちたいと考え、2021年度に、東大阪市教育委員会の協力のもと、同じ日本社会で暮らす、大学生とは世代や既存知識も大きく異なる小学5年生との交流会を行うことにした。本稿は、日本語教育学概論という授業で行った小学生との交流会と交流会を通じた大学生の学びについての報告である。

2. 交流会

2.1. 授業の概要

交流会を実施した授業は、2021年度春期に開講された日本語教育学概論（以下、概論とする）という授業

である。概論は、日本語教育課程において必修科目である。春期に開講され、1年生担当科目であることから、日本語教育課程を履修する学生がはじめに履修することを想定し、以下の3点を到達目標としている。

- A. 日本語教育学とはどのような分野であるのかを理解する。
- B. 日本語教育を通して、自分自身、他者、日本社会、さらに世界に目を向け、関心を持つことができる。
- C. 自分がおもしろい・もっと知りたいと思えることを見つける。

これらの到達目標を達成するため、2021年度の春期の概論では、日本語教育に関わる人々、日本語教育の歴史、日本語教育と国語教育の類似点と相違点、海外の日本語教育事情について学んだ。これらの中でも特に、日本語教育に関わる人々に重点を置いた。前提となる在留外国人の現状について調べ学習を行った上で、2019年に文化庁の文化審議会国語分科会がまとめた「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告改訂版）」で提示されている日本語教育人材の6つの活動分野—「生活者としての外国人」、留学生、児童生徒

等、就労者、難民等、海外一に基づき、それぞれの分野の人々が置かれている現状についてグループディスカッションを取り入れて、理解を深めていった。その他、日本語を教える現職の日本語教師の方3名にご自身の経験を話していただく機会も設けた。

続いて、概論の履修者について説明をする。概論の履修登録者は41名であるが、実際に授業に参加していたのは39名であった。1年生が26名、2年生が12名、3年生が2名、4年生が1名である。このうち、日本語教育課程を履修登録している者が21名おり、半数強である。なお、日本語教育課程を履修登録していない学生のうち、児童教育学部に所属している学生が8名いた。この学生たちは幼稚園教諭もしくは小学校教諭の資格取得を目指す学生たちである。所属する児童教育学部の教員に勧められて概論を受講したという。

最後に、授業方法についても述べておく。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、概論は一学期間を通して同時双方向型でMicrosoft Teamsを利用して実施した。交流会の準備及びその指導もMicrosoft Teamsで行った。なお、交流会の準備期間中に希望者のために、対面で相談できる回を一度設けた。

2.2. 交流会の目的

概論で小学生との交流会を実施したのには3つの目的がある。

1つ目は異なる背景の人と関わる機会を持つためである。多くの大学生にとって、同世代の人か、アルバイト先などで自分よりも上の世代の人と関わる機会はあるが、10歳近く年下の人たちと関わる機会是非常に限られている。下の世代の人たちとの交流を通して、小学生は小学生なりの考えを持っていること、たとえ年齢差などの違いはあっても意見交換が可能であることを理解する機会にしたいと考えた。違いがあっても互いに理解し合えるという経験は、相手に関心を持つための土壌作りにつながるのではないだろうか。1つ目の目的は概論の到達目標Bの前提になると思われる。

2つ目は相手に配慮して伝えるということを経験するためである。上述したように、概論は日本語教育課程の科目の1つである。したがって1年生の場合は2、3年後に日本語学習者に日本語を教える日本語教育実習に参加することになる。日本語教育実習では、日本語学習者がわかる日本語で説明しなければならない。だが、日常生活において意識せず使っている日本語の難易度を調整することは容易ではない。また、相手にわかりやすく伝えるためには難易度の調整だけでは不十分である。

どういう順番で、どのような補助資料を使い、どのように説明するかも、わかりやすさに影響を与える。そのため、1年生のときから相手に配慮して伝える経験を積み重ねて、相手がわかるように自分の伝え方を調整する能力を養ってほしいと考えた。文化審議会国語分科会がまとめた「日本語教師の資格の在り方について(報告)」においても、養成段階で「学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力」を養う必要があることが指摘されており、2つ目の目的は、概論だけでなく、日本語教育課程全体で養おうとする能力の育成を目指すものと言える。

3つ目は交流会の準備を通して授業で学んだ内容を振り返り、理解を深めるためである。概論では、ほぼ毎回の授業でグループディスカッションを行ったが、授業の半分以上の時間は、担当教員である筆者が行う講義であった。講義だけでは学生の深い理解には至らないと思われるため、講義で学んだことを小学生に伝えることで理解を深めてほしいと考えた。小学生に伝えるためには、まず自分自身が理解しておく必要があり、学生たちは授業内容を振り返ることになる。そして、それを小学生に理解できるように伝えるためには、大学生を対象とした授業で筆者が使った表現をそのまま使うわけにはいかず、学生たちは小学生にもわかる表現へと言い換える作業が必要になってくる。この過程を通して、学生たちの理解が深まることを期待した。3つ目の目的は、概論の到達目標Aの達成に深く関わると考えられる。

2.3. 交流会に参加をした小学生

今回の交流会は、東大阪市教育委員会の協力で実現した。まず、東大阪市教育委員会の担当者と筆者が事前打ち合わせを行い、小学生と大学生の交流会の実施を決めた。次に、東大阪市教育委員会の担当者が交流会に参加したい小学校を募ったところ、枚岡西小学校と布施小学校が希望を表明してくれたので、この2校と交流会を行うことになった。枚岡西小学校からは5年生114名、布施小学校からは5年生46名、合計160名が参加した。

なお、枚岡西小学校で今回の交流会担当になった先生に、交流会に参加した理由を伺ったところ、5年生で国際理解教育を進めていたことと、同じ東大阪市の小学校であっても、小学校間の交流がなかったため他の小学校を知る機会になると考えたことの2点であったという。

2.4. 交流会の準備

授業でははじめに、交流会の目的とおおまかな流れを説明した。交流会では、小学生と日本語教育の役割について考えてほしいこと、そのために概論で一学期間学んできたことを踏まえて日本語教育について発表をし、さらに各グループが設定したテーマについて小学生とディスカッションを行うことという点を伝えた。さらに、留意する点、考えてほしい点として次の4点を伝えた。

- 相手は小学生なので、かみ砕いて説明をすること
- 身近な例を使って説明すること
- 一方的な説明にならないようにすること
- 多様な背景の子どもたちがいることを忘れないこと

外国にルーツのある子ども、片親の子ども、障害のある子どもなど、子どもたちの背景も多様であることを考慮し、参加者全員が傷つくことなく、気持ちよく参加できるように気をつけてほしいと、特にdを強調した。

概論の受講生39名を2名と3名の19グループに分け、準備1日目の6月18日の授業でそのグループ分けを発表した。学生たちはこのグループで、発表の内容やディスカッションのテーマ、またその方法などを話し合いながら、Power Pointの作成を進めていった。準備の流れは表1の通りである。

表1 交流会の準備の流れ

日付	準備内容
準備1日目 (6月18日)	・交流会のグループ分け発表 ・グループで交流会の内容の検討
準備2日目 (6月25日)	・グループで交流会の内容の検討・ 資料の作成
準備3日目 (7月2日)	・グループで交流会の内容の検討・ 資料の作成 ・交流会のリハーサル
7月9日	・交流会当日

準備2日目に学生が書いた振り返りに、対面で交流会の準備をしたいという要望があったことから、準備3日目となる7月2日の授業は、希望者は大学の教室で準備ができるようにした。

東大阪市教育委員会には、小学校との調整、交流会で使用するTeamsのチームとチーム内にグループごとの19のチャンネルの作成を担当いただいた。チーム作成後にリハーサルも行った。小学校側には、小学生のグループ分けや名簿作成をしていただいた。今回は2校の

小学校の参加であったことから、小学校間で自己紹介カードのやりとりも行われた。

2.5. 交流会当日

9時の開始に合わせ10分前の8時50分から、チャンネルへの入室を始めた。大学生たちの中には自宅から参加する者や大学の情報処理室から参加する者がいた。小学生たちは、全員小学校におり、小学校で使用している端末からアクセスをした。枚岡西小学校は、小学生1人に1台端末が与えられており、各自がチャンネルに入室した。布施小学校は、グループに1台端末が与えられており、グループでチャンネルに入室した。一部Wi-Fi環境のせいで入室に時間がかかる大学生もいたが、入室できたところから、活動を始めていった。当日の流れは、表2の通りである。

表2 交流会当日の流れ

時間	内容
8:50~9:00	・Teamsへの入室
9:00~9:35	・大学生と小学生の自己紹介 ・大学生による日本語教育についての発表
9:35~9:45	・休憩
9:45~10:30	・大学生による日本語教育についての発表 ・日本語教育の役割についてのディスカッション

表2の流れに沿って当日の交流会を行ったが、大学生の発表が早く進んだ場合はディスカッションの時間を多く取るなど、各グループで調整をした。

3. 大学生による交流会の振り返り

交流会に参加した大学生たちには、交流会終了後に振り返りのレポートを提出してもらった。この振り返りレポートをもとに、交流会を通して大学生にどのような学びや気づきがあったのかを検討する。

なお、振り返りレポートは、39名中36名が提出し、このうち、本報告への引用を許可してくれた32名の振り返りレポートを分析の対象とする¹⁾。

3.1. 準備で大変だったこと・工夫

多くの大学生が準備で大変だったこと、悩んだこととして挙げたのは、小学生でもわかるように説明することであった。

このプロジェクトを進めていく上で難しかった点は、日本語教育のことを小学生でも理解できるような言葉でかみ砕いて説明することだ。

(学生 O)

小学生が相手の授業だったため、どのような言葉を知っていてどのような言葉を知らないのかわからなかった。今回教えないといけないことが小学生には難しい内容だったため、言葉選びが一番難しかった。

(学生 T)

今回の交流会のテーマは、一学期間授業で学んだことをまとめるという意味もあり、「日本語教育の役割」という難しいテーマであった。そのため、大学生たちは難しいテーマを小学生にも理解できるようにするにはどう伝えたらいいか、悩んだようである。

発表内容はどこまで易しくしたらいいのか、議論の内容はどこまで難しくしたらいいのか、大学生、高校生であれば年齢が近いとおもうがままに作ればいいものの、小学生の目線になることの難しさに気づいた。

(学生 S)

大学生たちがこのような悩みを抱えたのは、相手が同年代の大学生や高校生ではなく、年齢の離れた小学生だったからである。小学生にとってどういう表現ならわかりやすいのか、どういう内容なら理解できるのかを考えることは、相手の目線に立つことの大切さとその難しさの両方に気づく機会となっていたと思われる。

このような悩みを持っていたからこそ、大学生たちはそれぞれに工夫をしていた。

私たちが普段の授業で行っているプレゼンテーションのような説明の仕方や喋り方では、小学生は理解するのが難しい。だからこそ、どのような説明の仕方、話し方だったらわかりやすいかをベアの人と話し合った。その結果、私たちがただ説明するだけではなく、なるべく小学生が活動できるようにクイズ形式で日本語教育と国語教育について考え、学んでもらうように考えた。パワーポイントを作成する際も、文字だけではなく、イラストや色をつけ、内容だけでなく、見た目も工夫した。

(学生 K)

クイズ形式にすること、難しい漢字にはふりがなを、子どもが興味を持ってくれるように文字だけでなく、画像をたくさん入れた。・・・私が一番嬉しかったのは、小学生に少しでも興味をもってほしいと思い、アニメのイラストを入れたところ、「善逸カッコいいー!!」と叫んでくれたことだ。時間をかけてパワーポイントを作った甲斐があったと思った。

(学生 H)

複数のグループが一方向的な説明にならないようにクイズ形式を取り入れていた。また、Power Pointも大学生相手ではなく、小学生相手であることを意識して、文字の量や大きさ、イラストの挿入などで工夫が行われていた。これらの工夫が小学生に認められたとき、大学生はやり甲斐を感じる事ができたようである。

一方で、同様の工夫が効果をもたらさなかったケースもあった。学生 B は小学生が興味を持てるようにと、Power Pointのスライドにアニメのイラストを入れていたが、小学生はアニメをあまり知らなかったという。

実際に授業を行い、気付いたことは、思ってた以上に子どもたちはアニメを知らないということだ。案外、アニメの知らない私のほうが知っていたことから、少し驚きを感じた。私の小学校時代と、今の小学生の興味のある分野は少し変わってきているのかもしれない。

(学生 B)

大学生は彼女たちなりに小学生の目線で考えていたが、自分たちの想定が実際の小学生とは違うということを経験した。

「グローバル」という言葉を用いた際に生徒から「グローバルってどう言う意味ですか」と聞かれた際に私たちが今や当たり前を使う言葉も世代が代われば意味を理解しにくい言葉になることが分かった。

(学生 Y)

「グローバル」という言葉は、当たり前すぎて表現を検討する際に、学生たちの検討対象にならなかったものと思われる。このように、いくら相手の立場から考えようとしても、それには限界があることへの気づきは、相手の目線で考える大切さと同様に、非常に重要な気づきだと思われる。

これらの振り返りから、交流会の1つ目の目的「異なる背景の人と関わる機会を持つこと」と、2つ目の目的「相手に配慮して伝えるということを経験すること」は達成できたと考えられる。大学生たちは、小学生と年齢差があり、相手がどの程度の知識を有するかがわからなかったからこそ、どうしたら伝わるのかを考えて自分たちなりの工夫を行っていた。またそうやって考える機会を持ったからこそ、事前に想定したことと実際は違うことがあるという気づきが可能になったのではないかと考えられる。

3.2. 当日大変だったこと・それへの対処

次に大学生たちが当日の交流会で何に大変だと感じ、それにどのように対処したかについて見ていく。

今回はオンラインで実施したがゆえの難しさに、多くの大学生が直面していた。

実施で難しかった点や悩んだことは二つある。まず一つ目は、ネットワークの状態が非常に悪くて、お互いつながるのにすごく時間がかかりスムーズに進むことはできなかったことである。

(学生 I)

実施してみて予想以上にハウリングがひどかったのが今回の交流会の反省点だ。枚岡西小学校の生徒たちがハウリングのせいでこちらの声がほぼ聞こえていないと申し出たことが予想外で混乱した。

(学生 Y)

これらは対面での交流であれば経験することのない難しさであった。ただ、大変な中でも、大学生は大学生なりに対処をしていた。小学校の担当教員および教育委員会の担当者が、教室の中でそれぞれのグループの様子を確認してくれていたし、大学側からは筆者が各チャネルに入って問題がないか、確認作業を行った。だが、グループは全部で19あり、問題が発生したときにすぐ教員が対応することは困難であった。そのため、大学生たちは自分たちで解決方法を考え、対処しなければならなかったのである。

(枚岡西小学校の生徒たちから声がほぼ聞こえていないとの申し出があったことを受け) 布施小学校の生徒は通常通り聞こえていたようなので予定通り口頭で説明しつつ、枚岡西小学校の生徒に向けてチャットでも同じ内容を送った。

(学生 Y)

小学生のみんなに説明していく中で「わかった人は手で丸を作って教えてください。」と伝えるとみんなすごく丸を作ってくれていてコミュニケーションがとれたなど実感した。この方法を取り入れて良かったと思う。

(学生 A)

このように、想定外のことが起き、大学生たちはその場で対応を迫られた。通常であれば、教員にサポートを求めることもできたかもしれないが、今回はそれが難しい状況であったため、各自で対処しなければならなかった。その結果、大学生たちは自分たちなりに解決方法を考え対処しており、臨機応変な対応能力の養成につながったものと思われる。なお、臨機応変な対応能力は、概論の授業の到達目標および交流会の目的として事前に掲げていたものではなく、今回の交流会の副産物である。大学生たちは教員側の意図を越えて、能動的に学びを経験していると言える。

3.3. 交流会を通じた学びや気づき

今回の交流会を通して、学生たちに起きた学びや気づきは、大きく4つにまとめられた。

1) 授業を行う大変さについての気づき

普段、学生たちが教える立場に立つ機会は限られている。今回の交流会では、大学生が活動内容を考え、彼女たちが中心となって実際の活動を進めていった。普段とは違う立場を経験したことで、授業を行う大変さについての気づきが生まれていた。

交流会の準備・実施を通して得られた学びや気づきは2つある。・・・2つめは授業を行う大変さである。私は今まで先生方が準備してくださっている授業がこんなにも大変だということを今回のプレゼンテーションを通して気づいたのである。スライドは見やすいようにアニメーションや色を変えたりして工夫しなければならぬし、説明も理解してもらうために分かりやすいように伝えなければならないのである。さらにこれを時間内に収めるという行為は難易度が非常に高いとこの日本語教育学概論の授業で考えさせられたのである。

(学生 G)

教師という職業をこなす大変さというのを少しでも分かった気がした。私は今まで、高校の先生など

に対して、教科書に沿って教科書通りに黒板に書いてスラスラと読んでいるだけで、こんなもの誰にでも出来るだろうと思っていた。なぜなら、私から見た教師は、誰もが平然な顔をしながら文句も言わず、なんなくこなしていたからだ。しかし、今回日本語教師についてまとめ、パワーポイントを作って話す内容を決めるのは、すごく大変だった。先生が生徒のためにわかりやすくまとめて、それをわかりやすく伝えられているということに感心した。そして同時に感謝しなければならなかった。

(学生 H)

学ぶ側からは、教える側の準備の部分は見えない。そのため、教師が悩むことなくとも簡単に授業を行っているように見えるのであろう。しかし、自分たちが教える側の立場になったことで、実際には多くの準備があり、悩むことも多いことに気づけたようである。違う立場を経験することは、普段の立場からは見えない部分に気づくことができる貴重な機会である。

2) 授業をする側の姿勢・態度の重要性についての気づき

教師が行っている準備や工夫に加えて、教師がどのような姿勢・態度で教えるのかがいいかという点においても気づきが生まれていた。

今回得た教訓は、努力することと楽しむことが大切であるということだ。もちろん、より良い授業を送ることは最も重要であるが、教える立場である私が緊張し焦ってしまっただけでは小学生にも不安を与えてしまう。ですから、努力や準備を怠らず、楽しむことが大事だと学んだ。

(学生 R)

積極的に取り組んでもらうには発表者も積極的に授業することが大事だということだ。クイズをしたときに子どもたちが大いに盛り上がっていたことから熱意が伝わることでお互いにいい授業を作ることができるのだと学んだ。

(学生 N)

交流会を通して、学生たちは、教える側の姿勢・態度が、学ぶ側の姿勢・態度に影響を与えることを理解したと思われる。

3) 積極的に学ぶ姿勢・態度の重要性についての気づき

2) で示したのは教える側の姿勢・態度であったが、それと関連して、学ぶ側の姿勢・態度についても気づきもあった。

「外国で日本語教育が行われているか」という質問をこちらか説明する前に聞いてみたところ、「お互いを認め合うため」という生徒がいたことが予想よりしっかりした回答で驚いた。私が想像しているよりも小学5年生はすでに世界に関心を向けていることが分かった。・・・予想以上に小学生が積極的に質問をしてくれる姿勢を見て、私ももっと積極的に授業に取り組もうと思った。

(学生 Y)

最初は、小学生相手に交流会がうまくいか不安だったが、自分の意見を恥じることなく発言する小学生に驚いた。周りの目や周りの意見に流されてしまう自分を変えていこうと交流会を通して思った。

(学生 K)

今回の交流会は、大学生が中心となって活動を進めたが、大学生が教える側、小学生が学ぶ側と、役割が固定化していたわけではなく、大学生は小学生からも学んでいた。それが、学ぶ側の姿勢・態度の重要性についての気づきである。

2) の教える側の姿勢・態度への気づき、3) の学ぶ側の姿勢・態度への気づきに加えて、「教育というのは教える側の意識だけでなく、教わる側の意識との相互交流なのかもしれないと学んだ」(学生 M) や「授業は教える側と学ぶ側がいて成り立つものだと学んだ」(学生 U) といった振り返りもあった。

ここから、授業が教える側だけが作るものではなく、学ぶ側とともに作っていくものであることに気づけたことがわかる。ややもすると、学生たちは受身になりがちである。今後の授業に臨む姿勢・態度にも変化が生まれることを期待したい。

4) 日本語教育についての理解の深まり

授業で学んだことと交流会で発表をする内容が繋がっていたことで、授業で学んだことを振り返り、理解を深めることができたようである。

交流会の準備を通して得られた学びや気づきは、まず日本語教育と日本語について調べることをもう

一度再度復習することができたことである。

(学生 I)

準備をしていく中でこれまで学んできた日本語学と国語学の違いについて改めて考えたため違いについての理解をよりいっそ深めることができ、自分自身のスキルの成長もできたのではないかと私は考える。

(学生 J)

交流会を行う3つ目の目的は「教えることによって授業で学んだ内容を振り返り、理解を深めるため」であった。学生たちの振り返りから、この目的を達成することができたと考えられる。

5) その他の学びや気づき

その他の学びや気づきとして何点か取り上げる。

まず、他者と協力する大切さについての気づきである。

人と協力しながら一つの目標を達成することの重要性に気付いた。交流会の準備に取り掛かるまでは、小規模で話し合っただけで問題を解決していたが、今回は違う学年の先輩とコミュニケーションを取りながら、日本語教育について調べ、パワーポイントを作成することで、社会に出てから幅広い年齢の人とプロジェクトを進める練習をすることが出来た。

(学生 O)

この振り返りと関連して、他学年との交流がおもしろかったという意見もあった。

他学年の人と何かを企画して行うことは、大学で初めてのことであったのもあり、不安やドキドキもたくさんあったが、交流会が終わってからは仲良くなることができたので、他学年との交流は面白いと感じた。

(学生 W)

交流会のグループ分けは可能な限り、学科・学年が多様になるようにした。その結果、授業外での打ち合わせ日時の調整は難しかったようであるが、それ以上に得るものがあったことがわかった。

次に、小学生から得た学びである。

実施したときに1番感じたことは、小学生は私たちとは違う別な視点で考えることが出来るということ、私たちにとって新しい発見や勉強になる交流であったということである。小学生と当日ディスカッションをして「日本語教育と国語教育のちがいが同じ」について、私たちでは見つけることが出来なかったことを積極的に発表してくれ、今小学生がどんなことを学んでいるのかも勉強することが出来た。

(学生 Z)

類似した振り返りとして「小学生の想像力が豊かで協力的で私たちも小学生から学ぶ事ができた」(学生 C)というものもあった。これらの振り返りから、交流会を年齢差などの違いがあっても意見交換ができるということに気づく機会としたいという交流会の1つ目の目的が達成できたと思われる。

次の気づきは、交流会の準備段階で大学生に留意してほしい点として伝えていたことに対する気づきである。

今回の交流会の準備と実施を通して得られた学びの1つ目は相手の育った環境にも気を遣うことの大切さであるということである。交流会内で興味のある国や行ってみたい国を聞いた際に、韓国に血の繋がりがあがあるため韓国に行ってみようという生徒がいた。もちろん韓国はいい国だと思うが言葉の間違いでその生徒が傷つくことを言ってしまうまいかどうか意識して授業を行った。また、外国人がどのような職業につくかを発表する際にも先生が仰っていたように生徒の親がその職業についている可能性があるため全ての職業に失礼の内容に説明することを意識した。

(学生 Y)

ここでの気づきは、日本語教師にならなかったとしても、あらゆる場面で活かすことができる学びであると考えられる。場面が変わっても、常に念頭に置いておいてくれることを期待する。

最後は、オンラインでの交流会だったことで生まれた学びである。

相手は常マイクをオフにしているためこちらが質問しなければ発言権がない。さらにマイクオンの仕方が分からず、悩んでいるのか、はなしていいのかわからない状況にあるのか、司会進行を務める私た

ちが、実際に会って授業をするよりも聞いている側に寄り添う、気遣う、見極めるという力をつけることができた。オンライン授業の増えた現代に必要な力を身につけることができたように思う。

(学生 S)

2021年度はコロナ禍であるためオンライン授業に切り替えたが、ポストコロナにおいてもオンラインはさまざまな場面で活用され続けることになるであろう。学生 S が書いているように、今回の交流会が現在のオンライン時代に必要な能力の育成につながったものと思われる。

以上、交流会を通じた大学生の学びや気づきを整理した。ここから、小学生との交流会を通して、大学生には多くの学びや気づきが生じていることが明らかになった。そして、交流会を行う3つの目的は概ね達成できたと考えられる。

5. おわりに

今回の交流会は、オンラインでの準備・実施だったこともあり、多くの学生たちは不安を感じていたようである。しかし、「今回、小学生との交流会やる前はすごく不安だった。しかし、やってみるとすごく楽しくて小学生に教えるのは難しい部分もあるけれど理解してくれた時の達成感をすごく感じた」(学生 A) という振り返りが示すように、学生たちにとって、達成感があり、学びの多い交流会になったと思われる。今後も学生たちが気づきを得られる機会を取り入れた授業設計を考えていきたい。

注

1) 学生の振り返りレポートからの引用には誤字脱字が見られるが、原文のまま引用した。

謝辞

大変お忙しい中、交流会の実現に向けてご尽力下さった東大阪市教育委員会の担当者の方、枚岡西小学校と布施小学校の5年生の担当の先生方に、心から感謝を申し上げます。

参考文献

文化審議会国語分科会 (2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改訂版」
文化審議会国語分科会 (2020)「日本語教師の資格の在り方について (報告)」